

1 青年期の課題と自己形成

1.0.1 人間とは何か？ 文化とは何か？

人間観 人間の定義 人間 homo sapiens sapiens (人, 賢明な←ラテン語)

人間観: 「人間とは何か」という問いに対する答え

| | | |
|-----|------------------------|--|
| | 英知人・知性人 | 知恵のある人, 18世紀生物学者リンネによる名称 古代ギリシャの理性人 |
| | zoon politikon | アリストテレス『政治学』による人間の定義 |
| | 宗教人 homo religiosus | imago Dei () としての人間, 再び神と結びつくという聖書の人間観 |
| | 工作人 | 人間のみが世界を自身にとって望ましいものに改造することができるとするフランスの哲学者 () の定義 |
| | animal symboricum | ドイツの哲学者カッシーラによるシンボルをあやつる動物という定義 |
| | 遊戯人 | オランダの歴史家ホイジンガ (→資料 p.4) による人間の定義 |
| | homo universalis | ルネサンス理想の人間像(ブルクハルトによる) |
| 職業人 | 職業人 | 神の栄光を地上にあらわすため神に与えられた仕事にいそしむ。資本主義の精神につながる宗教改革の人間観 (M・ウェーバーによる) |
| | 経済人 | 物欲の充足を利己的に追求し, 自己の利益の最大化を図ることが人間の行動基準 アダム・スミス (経済学の父) の人間観 |
| | 錯乱する人 | 本能が壊れてしまった人間に対する文化の必要性 |
| | 教育されなければならない人間 | ランゲフェルト (オランダ教育学者) |

(): 20世紀フランスの実存主義哲学者

= 「人間は定義できない…人間はみずからつくったところのものになる」 ⇒資 p.222

パスカル (17世紀フランスの科学者, 宗教思想家) の人間観 →資 p. 167 教 p. 129

「人間は… () である」 (『パンセ』347)

人間の 悲惨な側面: 自然・宇宙に比べての小ささ, 弱さ, 有限性 } () としての人間
偉大な側面: 思考, 精神, 人間の尊厳の根拠

幾何学の精神: 厳密で論理的な科学の精神

() の精神: 柔軟で直感的な精神

⇒矛盾を抱えて不安な人間に救いを与えるのが神の愛

文化 (culture ← 羅 cultura (耕作された土地)) cf. () = 農業 (agri=畑)

: 自然に対して、学問・芸術・道徳・宗教など、人間の精神の働きによって作り出され、人間生活を高めてゆく上の新しい価値を生み出してゆくもの。(『国語大辞典(新装版)』小学館)

文化と文明の違いの考え方

1. 農耕文化と都市文明
2. 精神文化と物質文明

() = 対抗文化: 支配的文化(メインカルチャー)に敵対し反逆する下位文化(サブカルチャー)
 ex) 大人社会への反抗としてのロック、ヒッピー⇒若者文化ユースカルチャー
 → 文化相対主義 vs. 自民族中心主義(エスノセントリズム)

野生児: 人生の早期から人間的な環境を奪われ、野生生活を送った子供

ex.) アマラとカマラ(狼少女), アヴェロン(南フランス)の野生児

⇒ 言語をもたない, 直立歩行が不可能, 羞恥・性的関心を欠く, 動物的食事習慣

カマラ: スキンシップなどの養育によって, 1年半後直立, 4年目に6語を話すようになり, 5年目に手を使ってコップから水を飲む。17歳までに45語の言葉を話し, 衣服も自分で着られるようになった。このように普通児並の発達はできなかった。(自閉症児説もある!)

資料 野生児アマラとカマラ

: 16~17歳になっても普通の子供の3~4歳程度の能力にしか回復しなかったといわれる。

インドのカルカッタに近いある村で、オオカミのすむ洞窟の中から2人の少女が発見された。1920年のことである。大きい方は8歳くらい、小さい方は1歳半くらいと推定され2人とも生まれてまもなく、オオカミにさらわれたのであろうと思われた。孤児院に収容されたが、アマラと名づけられた小さい方は1年足らずで死に、カマラと命名された大きい方は、それから9年間くらいの間、他の孤児たちと一緒に生活した。……人間の発声法を知らないカマラは、オオカミのようなほえ声を出すだけで、夜中にはさかんに遠吠えをした。食べるものはペチャペチャとなめて食べ、腐った肉をあさったり、ニトリを食べたりもした。着物を着せられたり、風呂に入れられることを極端に嫌い、人間の言葉はしゃべらず、聞いても理解できていなかった。カマラはオオカミとして行動できて人間行動の仕方は知らず、人間としての性格はできていなかったのである。その後の9年間に示したカマラの進歩は確実であったが、まことに遅々としたものであった。(A・ケーゼル『狼にそだてられた子』)



資料 ホイジンガ『ホモ・()』

ホイジンガは理性人という規定が18世紀に頂点に達した後、むしろ人間活動の本質的機能を遊ぶことに見て『ホモ・ルーデンス』を著した。ホイジンガは遊びを、日常生活からの離脱と虚構性の意識、楽しさを本質とする自由で自己目的な活動、没利害性、限定された時間空間と独自の規則性といった点から規定し、人間文化が遊びの中において、遊びとして発生し、展開してきたとする主張を、法律、戦争、学術、文芸、芸術、哲学といったものの生成と展開を追跡することによって具体的に提示した。また、ファシズムの嵐の状況下、ホイジンガは現代文明を遊びの精神の喪失形態ないし墮落形態として批判した。(『岩波哲学思想辞典』より)

ホイジンガ(1872-1945): オランダの歴史家、文明批評家。西ヨーロッパ中世史を研究。(文化史)を主張し、14~15世紀のブルゴーニュ公国を舞台に繁栄した文化の諸相と人々の生活を豊かなイメージと鋭い感受性で描いた『中世の秋』(1919)を発表して大きな反響を呼んだ。1938年『遊び』論『ホモ・ルーデンス』を発表した。(cf.倫理資料集 p.4)

人間とは何か—— 百科事典による記述

■人間 human being

人、人類とほぼ同義であるが、人文科学的なニュアンスをもって受け取られる。本来は仏教用語として世間と同じ意味に使われたが、人界に住むもの、すなわち人を表す日常語として単数・複数の区別なく用いられるようになった。ヨーロッパ語では、人間に相当する語は男性の意をも含むことが多いが、日本語ではそのようなことはない。このことは、両者の間で人間という認識の内容が異なることを示す。一般には動物および神と区別する語であるが、古今東西にわたり人間は多様なものと理解されている。アイヌ語で「アイヌ」とは人間のことであり、台湾の山地系住民の「タイヤル」もタイヤル語で人間を表す。このような事例は世界各地で見られるが、彼らがかつて広大な地域に散在し、生活習俗を異にする集団同士が接触する機会がきわめて少ない状態に置かれていたことを考えれば、自称民族名すなわち人間ということは当然である。

私たち自身をも含む「人間とは何か」については古来多くの思想家が論じた。そこでは、人間が動物の一種であり、直立二足歩行することは自明の事実とされており、それ以上の特性をもって人間を規定しようとしている。「英知人 Homo sapiens」「工作人 H.faber」「言語人 H.loquens」「政治人 H.politicus」「経済人 H.oeconomicus」「宗教人 H.religiosus」「芸術人 H.artex」「魔術人 H.magicus」「遊戯人 H.ludens」などは、いずれも人間の特性の一面を物語っている。

パスカルは「人間は考える葦(あし)である」として、人間の弱さと思考の優越性を説いたが、形而下(けいじか)的には人間はけっしてか弱い存在ではなく、多くの動物たちにとり脅威となっている。今日の自然破壊にみるまでもなく、後期旧石器時代以降、人間は多数の生物種を絶滅、またはそれに近い状態に追い詰めてきた。それというのも、武器や火の使用ばかりでなく、優れた知能に由来する激しい攻撃性の展開の結果であったといえる。このため人間は「食肉類の特性をもつ霊長類」とみなされる。殺人、拷問、戦争などの実例から、人間ほど残忍な動物はいないといわれながらも、他方、ほとんどの動物が利己的にふるまうなかであって、人間は利他的にも行動することが可能で、日常的に他人に尽くし、弱者を扶助愛護する唯一の動物である。多くの動物では老いて生殖能力のないものは死んでいくが、老人は社会の保護により生存し、その知恵と経験をその社会に十分に生かす。そこにヒューマンイズムの根源の姿をみいだすことができる。

自然選択は人間社会においては部分的に作用する。人間は人間のつくった環境のなかで育ち、生きるため、その属性はしばしば自己家畜化で説明されるが、家畜とは異なり、人間は主体性を維持する。人間は技能習得や知能発達のため、その社会特有の形で教育を受ける。したがって生得的な性質のみを維持して成人することはない。人間は一定の価値観をもつよう期待され、その身体も生活も彼が居る社会の文化の影響を受け、着衣を強制される。人間は不自然であることが自然である動物といわれる。

人間は周囲の物体を選んで、これを加工して道具をつくる。道具なしでは人間は生存することができない。人間が人間として生きるためには人間関係の維持がたいせつである。人間の社会は夫婦および家族を基本単位とし、他方いずれの社会も近親相姦(そうかん)を忌避する。また人間の社会は言語をもつことにより、今日のように発展した。また、人間は言語を通して思考することが多い。とくに文字の有無によって人間の社会は未開と文明に分けられてきた。なお人間という語は人柄の意を含む。このことは人間における精神性の重要さを示唆している。

〈香原志勢〉(C)小学館『日本大百科全書』

・下線部に見えるようにこの百科事典の記述の中には「人間観」が極力排除されているように見えます。それはなぜだと思いませんか？

文化とは何か—— 百科事典による記述

【現代における〈文化〉の意味】

文化の概念の定義については、哲学、歴史学、社会学、人類学においてさまざまになされてきた。しかし、たとえば、現代の社会学においては、文化とは何かと問うことよりも、文化は社会のなかでいかなる作用や機能を果たしているかが問題とされるようになっていく。アメリカの社会学者ベル Daniel Bell によると、現代の脱工業社会における文化の問題とは、文化が社会構造から乖離(かいり)してきていることである。工場や企業における労働組織や職務配分、地位の配置など産業社会の**社会構造**とされている部分は、機能合理性、最小コストの原則、欲望延期説的な価値を前提としている。これに対し、人々の行動や生活のスタイル、芸術的な感性など〈文化〉については**対抗文化(カウンター・カルチャー)**の影響のもとで反合理主義的なモダニズムが広まっている。すなわち、産業構造はプロテスタンティズム的禁欲倫理を求めもののままであるのに、文化は自己表現的、ないし生活享受的なものとなっている。文化は社会構造に働きかけるものであるから、この乖離の長期的な結果を社会学者は問題とするのである。

社会の全体のなかで文化をみると、**文化とは家庭や学校、マス・メディアなど制度の網目を通じて伝達されていくものである**。伝達されるものの内容からいえば、文化には社会に関する価値、規範、神話、象徴、情報などが内包されている。それゆえ、文化は社会のさまざまなレベルの行為者の施策に媒介されるとともに、伝達されるものの内容を媒介としつつ、一社会の人々の間での資源、権力、威信などの配分、すなわち、社会構造に影響をあたえる。それゆえ L. アルチュセールなどのようにこれらの文化伝達の制度をすべて**国家のイデオロギー装置**と考え、支配階級による支配への国民の合意を調達することがその機能だと説明している人々もいる。このような観点から、学校教育とマス・メディアを現代における主要な問題点として重視する研究者も多い。

このような機能主義的な文化の概念とは異なり、構造主義の影響のもとでは、文化は人間の知の記録の集積であり、その知はコードとして構造化されると考えられた。他方、文化をすべて客体的な構造や文化所産にとらえることに対して、文化を何よりも人間が豊かな意味を生きる場所の体験であるとする考え方も広まっている。フランスの社会学者モラン Edgar Morin は、文化を構造と体験との間で相互に媒介を行うシステムとして定義している。文化システムは人間のさまざまな体験のうちから、共通なものとして蓄積可能なものをとりだし、おのおのに芸術、文学、哲学、などの作品の形でコード化し、記録し、文化的財として蓄える。これらの文化的財は、その言語や教養などその文化コードを所有する人々によって利用されるのである。かつて体験されたり創作され作品としてコード化されたものは、文化のコードの所有者によって**解読され、想像のうちで体験される**。このようにして人間は現実と虚構を分離したり混合したりすることによって、現実に対して効果的になしかたで働きかけることができるし、また想像のなかでの生の享受ができる。社会における人間と人間のコミュニケーションは、このような文化システムを媒介しつづなされるところが大きい。

モランの文化の定義は、現代の文化のうちにみられる**教養文化(高級文化)と大衆文化との対立**をよく説明するとともに、現代における**教養文化の危機**をよく説明する。教養文化は高度に知的であり、洗練された趣味という知のコードを所有することにほかならないが、その所有は有利な社会的地位の独占と結びついているから、一般の人々はそこから排除される傾向が強い。だがまた、教養文化の所有者の間で成立する知の共同体においても、教養文化を活性化してきた知のコードの更新において、現代では行詰りをきたしている。

さらに今日、文化は社会的な不平等を説明する**文化資本 capital culturel** の理論において問題とされている。フランスの社会学者ブルディユ Pierre Bourdieu は**社会的な不平等を経済的なそれからではなく、文化資本の配分の不平等から説明している**。すなわち、**文化資本とは大学を含めた学校教育体系を通じ教育・形成された人々により獲得される理論的・技術的な知識のこと**である。この知識は中産階級の家庭の有する教養と近いものであることからこの階級の人々には有利であり、学校教育体系は普遍的な知識をあたえるという外観のもとで階級的な選別を行っている、と。文化資本は個人に身体化されたり、卒業資格として制度化された状態で存在する。いずれにせよ**経済的資本は、現代の社会のさまざまな回路を通じて文化資本に変形していくし、また文化資本は社会的地位と経済的利益をもたらす**、このようにして社会構造の再生産は保障されるのである。近年においては、文化を規範や教養の普遍的存在様式と考えるよりも、その**普遍的な外見ゆえに社会的な不平等を再生産するもの**とみる研究者が増えている。 杉山 光信
平凡社『世界大百科事典』

・ベル、アルチュセール、モラン、ブルデューらがそれぞれ文化をどのようなものとしてとらえているか、読み取れましたか？

1.0.2 欲求と適応

欲求 (need) : 生物が生きるために必要なものが欠乏したときに、それを求めようとする行動の心理的な原動力

() 的欲求 (一次的欲求) : 生物としての人間の生命機能を維持し、種族を保存しようとする欲求。ex) 呼吸, 飲食, 排泄, 睡眠, 性欲など

() 的欲求 (二次的欲求) : 社会生活を営む上での文化的, 精神的欲求

cf. () : 米心理学者) の欲求階層説 →教科書 p.12 資料集 p.9

欲求は、①生理的欲求, ②安全への欲求, ③所属と愛情の欲求, ④尊重 (承認) の欲求, ⑤自己実現欲求といった形で階層をなしており、それぞれが飽和水準に達すると、次の高い階層レベルの欲求充足が刺激されて行動のイニシエーター (起爆剤) になる。() の欲求が人間の最高の欲求。

※欠乏欲求 と成長欲求

() (adjustment) : 個人が環境と調和した関係を保つこと。家庭, 学校, 職場などの環境の要請に応じながら個人の欲求を満足させている状態。

不適応 (maladjustment) : 適応がうまくいかない状態。

欲求不満 (フラストレーション : frustration) : 欲求が充足されず緊張や不安が高まった状態。

不適応行動を起こしやすい。⇒欲求不満への耐性 ()

() (コンフリクト : conflict) : 個人内に対立する二つ以上の動機 (欲求, 衝動, 意見など) が同時に同じ強さで存在し, 相争っている状態

※フロイトは本能的衝動 (イド) と道徳 (超自我) の間の葛藤を神経症 (ノイローゼ) の原因と考えた。

欲求不満 (適応をうながすサイン) に対する反応 資料集 p.10 教科書 p.12

- 1.合理的解決
- 2.攻撃的行動, 近道反応 (衝動的欲求不満排除)
- 3.防衛反応 (次頁)
- 4.失敗反応

フロイトの思想あるいは人間観

フロイト (1856-1939) : オーストリアの精神病理学者, () の創始者。主著『精神分析入門』『夢判断』

精神分析 (psychoanalysis) : 19 世紀末フロイトによって体系づけられた深層心理学, 精神病理学における学説。精神の深層, つまり潜在意識内のコンプレックスを対話, 連想, 夢判断などの方法により表面の意識を分析することによって発見しようとするもの。病気治療だけでなく, 芸術, 宗教その他ひろく精神現象の理解に応用されている。

⇒ヒステリー (神経症の一種) の原因を () =心的外傷 (psychic trauma) であると考えた

() =post-traumatic stress disorders =心的外傷後ストレス障害

※ヒステリーの運動系の症状としては, 立てない, 歩けない, 四肢の麻痺, 痙攣 (けいれん), ふるえ, 声が出ない, 飲みこめない, 嘔吐など, 知覚系の症状としては, 皮膚知覚の鈍麻, 皮膚知覚の麻痺, 痛覚過敏, 聞こえない, 見えないといった機能障害をあらわす。

() : 意識されず自覚のない精神活動。意識や行動に影響するが, 夢や精神分析によらなくては意識されない。

() : 心の中のしこり・かたまり (欲望が抑圧によって無意識中に押し込められ形成)

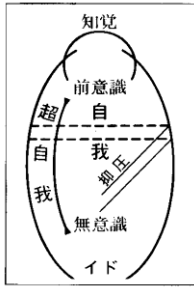
() ・コンプレックス : 人が両親に対して抱く無意識的な愛および憎悪の欲望のすべて。父親を殺して母を妻としたギリシア伝説のオイディプス王から名付ける。→資 p.229

錯誤行為 : 「言い違い」「もの忘れ」「置き忘れ」などにあらわれる無意識の欲望

夢判断 : 「夢の心的機能は () 充足にある」

フロイトの思想あるいは人間観（つづき）

・ 心的装置論：人間の心、人格（パーソナリティ）を自我・イド（エス）・超自我の3要素から説明



フロイトの「心の構造」の図
自我は、その大部分を占める前意識的なものと、無意識的なものに分かれ、無意識的なイドにつながっている。超自我は自我ともイドとも連絡はありながら、一応の独立性をもったものとされている。図の下方のイドが開いたままなのは、図示できないほどの巨大さを意味している。（フロイトの『続精神分析入門』による）

自我（エゴ ego）：人格の主に意識的な部分。（ ）原則に従い、現実への適応を図る。

イド id（エス Es）：性衝動（リビドーlibido）と攻撃衝動の貯水池。（ ）原則に支配される。

超自我（スーパーエゴ super-ego）：養育や教育によって形成された無意識的な良心。禁止と抑圧。自我の検閲者

生の本能（エロス）：自我本能（自己保存の本能）と性本能（種族保存の本能）

死の本能（ ）：自分自身を攻撃し破壊することにより無機物の不変性(死)に回帰しようとする欲求

・（ ）・防衛反応（defense mechanism）：合理的な適応に失敗したときに自我が無意識のうちに用いる不合理な適応手段、一種の自己欺瞞。頻繁な反応は神経症的症状の形成をもたらす。

- ・（ ）：欲求を押さえつけ無意識の中に押し込める ex)忘却
- ・（ ）：もっともらしい理屈を付けて自分を正当化する ex)すっぱいぶどう
- ・ 同一視（同一化）
 - ①取り入れ：他者の好ましい特性を自分と同一に見なす ex)ドラマの主人公のつもり
 - ②（ ）：認めたくない自分の特性を他者に転嫁する
ex)嫌いな人に嫌われていると思ひこむ
- ・（ ）：抑圧された衝動を意識しないために反対の傾向を強調する
- ・ 逃避・退行：現実の困難から空想、病気に逃れる。発達段階の逆戻り、幼児化。
- ・ 置きかえ（転位）
 - ①代償・補償：願望が接近したものや類似したものに置き換えられる ex)子供がわりのペット
→A・アドラーが重視：劣等感コンプレックスを解消するために他の方面で優越感を持つとする。
 - ②（ ）：リビドーを芸術活動や知的活動など社会的に価値のあるものに向ける

ユングの思想あるいは人間観

ユング（1875-1961）：スイスの精神医学者、フロイトの『夢判断』を読み、彼の協力者となるが後に考えの違いから訣別。主著『心理学的類型』『心理学と錬金術』『変容の象徴』『アイオーン』

・ 無意識の構造

個人的無意識：個人の意識内容が忘却されたもの、意識によって抑圧されたものなど

（ ）的（普遍的）無意識：遺伝的に獲得された、人類に共通の普遍的な無意識。元型によって構成される……芸術家や宗教家のインスピレーションの源

（ ）：archetype）：神話、伝説、妄想、幻覚などに共通してあらわれる普遍的なイメージ

元型の例：グレートマザー（太母）：すべてを包む母なるもの

シャドウ（影）：自分につきまとうもう一人の自分

アニマ：男性の中の女性的な面、 アニムス：女性の中の男性的な面

精神分析とリビドー —— 百科事典による記述

■精神分析 psychoanalysis

精神分析はオーストリアの精神科医フロイトによって初めて試みられた心理治療の方法のことであるが、今日では一つの心理学の考え方、あるいは研究の方法のことをも意味している。

■治療法としての精神分析——意識と無意識■精神分析のオーソドックスな治療の方法は、患者を長椅子(カウチ)に寝かせて自由連想を試みるように求める。頭に浮かんだことはどんなことでも話すように求める。たとえ治療とは関係なく、道徳的に認められないようなことであっても、思い出したままのことを話すように求めるのである。この意味で精神分析治療は、話をする治療であるといってもよい。しかし、これは、自分の腹のなかにためていたことを話して気が晴れるから治療になるという意味ではない。腹のなかにたまっているものは、日常的な意味でのおしゃべりをしたぐらいで晴れるものではない。自由連想法というのは、おしゃべりでなく、ほんとうの話ができるようにするものである。おしゃべりをすると、ほとんどそのおしゃべりは自己弁護であり、自分の正当性を相手に納得させようとしたり、同情を求めようとしたりするものになってしまう。自分のありのままの姿をことばに出すというより、見せかけの自分をつくりあげることになる。この違いを、フロイトは意識と無意識という概念で示している。

■重要な意味をもつ転移■治療法の問題として重要なことは、どうしたら自己弁護でない話をするができるようになるかである。患者は自由連想で自己弁護し、防衛し、抵抗を試みるが、こうした抵抗が分析者によって解釈されるにつれて、特殊な抵抗を試みるようになってくる。これが「転移」とよばれているものである。患者は自分が子供であり、分析者が親であるかのような感情をもつようになり、「自由連想」のなかに親と子の関係が再現されたかのような態度がつけられてくる。転移というのは、幼児期の親子の関係が自由連想の分析状況のなかに移されたという意味にほかならない。このことは別の表現をすれば、患者は日常生活において新しい状況で新しい人と対面していても、その新しさを認識することができず、幼児期に親と子の間でつくりあげた人間関係に従って行動しているということであり、その「親子関係」がさまざまな問題点を含んでいるということである。「三つ子の魂百まで」といわれ、教育問題として、しばしば2歳までとか5歳までとかの家庭教育が重視されるのは、幼児期における親子関係において、後年になっても消すことのできない刻印が押されていることを意味する。しかし、精神分析にとって重要なことは、幼児期の親子関係での経験そのものというより、分析状況のなかに転移されたもの、それが問題であることはいうまでもない。

■エディプス的關係■分析状況で転移された親子関係は、エディプス的關係である。父・母・子の、いわば三角関係である。男の子の場合を例にとつていえば、エディプス的關係は、母親に愛情を抱き、父親に敵意をもつことをいう。男の子は父親を亡きものにし、母親と2人だけの関係を温存しようとする。これはいうまでもなく「近親相姦(そうかん)」の願望で、抑圧される運命にある。父親に対する敵意の報復として、父親から去勢されるのではないかという不安をもつ。この不安をなくすために、男の子は自分を父親と同一視し、エディプス的關係を克服しようとする。

克服されないうちに、さまざまな症状がおきてくることになる。転移的關係のなかでは、こうした意味での症状が新しくつけられてくる。その症状の意味を理解することが、治癒につながってくる。こうした精神分析の治療の考え方は、症状そのものを直接になくそうとするものではない。風邪(かぜ)をひいて熱が出たので解熱剤を服用して熱を下げようとする対症療法ではない。症状そのものが問題でなく、こうした症状をつくりだすもとになっているもの、エディプス・コンプレックスとか去勢コンプレックスが問題なのである。

これらのコンプレックスを清算しない限り、対症的に症状をなくしても、それにかわる新しい症状をつくるだけであると考ええる。

■夢の解釈■精神分析において夢の解釈が重要な意義をもつのはこのためである。さらに一歩進めて考えるならば、夢と「白昼夢」といわれる空想も類似のものであるから、精神分析を治療としてでなく、心理学の研究の手段として考えるならば、「空想」を研究しようとするものであるといえる。夢は無意識を知るための王道であるといわれるが、夢や空想の研究は、心の無意識過程、すなわち一次過程とよばれるものを明らかにすることができる。これを一般的な心理学の用語でいえば、動機を明らかにしようとしているといつてよい。たとえば犯罪がおこるなら、その動機はなにかがまず第一に問題になるが、無意識の一次過程を明らかにしようとするのは、こうした動機を明らかにしようとするものにほかならない。警察は犯罪者の白状したことをもとにして怨恨(えんこん)であるとか金取りであるとか考えるかもしれないが、分析家は患者の病気の動機はすべて意識されていない性衝動にあるとみなしている。そのため、精神分析は汎(はん)性欲説であるといわれたりすることがある。しかし、精神分析の「性欲」の概念は常識的な意

味での性欲とはかなり異なっている。

■精神分析における性欲■常識では性欲は食欲と同じように生物学的な本能といってよいほどのものと考えられている。また、性欲は思春期になって初めて現れるものであると考えられている。しかし、フロイトにおいては、性欲は幼児期から現れているものであり、生物学的本能とは別個の心理的事実とみなされる。このことは、人間の心理を生物学の知識によって類推しようとするのではなく、心理学固有の概念によって人間の心理を説明しようとするものであるといえる。この意味では、他の心理学の理論のように生物学を援用するのではなく、純粋な心理学をつくらうとするものである。しかし、これは、人間も生物であることを否定するものではない。だから、性欲は、生物学的な食欲に伴って発現してくる衝動であると考えられる。すなわち、性欲は、幼児が母親から授乳され満足して眠り始めるときのあの満足経験を再現しようとするものであると考えられる。これは、一度うまい食べ物を味わうと、その味を忘れることができなくて、もう一度あのようにうまい物を食べたいと願うのと同じことである。同じようにうまい食べ物を探しても、二度と同じようにうまい物に出くわすことができないように、幼児は満足経験を再現しようとするが、同じような満足を体験することができない。性欲には挫折(ざせつ)が付き物である。

こうした幼児性欲は、口唇期、肛門(こうもん)期を経てさまざまな身体的部位を利用して満足経験を再現しようとするが、男根期(3~6歳ごろ)に至って男根を通して満足を得ようとする。しかし、これは近親相姦の禁止によって妨げられ、満足経験の再現を放棄しなければならなくなり、潜在期(5~11歳ごろ)に至る。そして思春期(12~17歳ごろ)に至って、初めて近親相姦の願望はまったく変容を受け、他人との間に異性愛としての性欲が現れてくる。性欲はもともと母親からの授乳を契機にして発生してきたものであるから、養育者や保護者に性欲が向けられ(男根期)、さらに成長するにつれて、養育者や保護者と類似で、その代理となるような人に向けられる。これに反して、指しゃぶりのような自慰行為にとどまるなら、性欲は自分自身に向けられ、いわゆるナルシズム(自己愛)とよばれる性愛の種類、たとえば同性愛がおきてくる。幼児性欲は、満足を得られるならば、どんな対象であろうと手段として利用する。だから性欲には定型というものはない。なにが正常でなにが異常であるかを定めることができないことは、性生活の報告書の示すとおりである。

フロイトは後期になると、性欲をもっと包括的立場から考えるようになり、死の衝動(タナトス Thanatos)に対立する生の衝動(エロス Eros)として考えるようになる。

ここでは満足経験の再現というより、衝動の一つの特質とみなされる強迫的に反復しようとする側面が強調され、満足経験の究極は静謐(せいひつ)、涅槃(ねはん)にあるという考えが示される。いずれにしても、性欲の実際問題は抑圧の運命を担うものと考えられる。性欲は抑圧と切り離して考えることのできないものである。(C)小学館 外林大作

リビドー libido

本来ラテン語で強い〈欲望〉を意味する語。性科学者モル A. Moll は、これを〈性衝動〉の意味、つまりリビドー・セクスアリス libido sexualis の意味に限定して用い(1898)、さらに S. フロイトによって精神分析理論の一核心をなすリビドー理論に導入されることになる。フロイトはこの用語をモルから借用したと述べている。フロイトのリビドー概念は彼の生涯の間で変遷した。初期の理論では、リビドーとは性的なエネルギー(その表現は多様な心的・身体的表現をとりうる)であり、〈自己保存本能〉(自我本能)とは対立するものとされていた。しかしのちには、自己保存本能もリビドーとともに作動するものと考えられた。そしてリビドーが自己に向けた状態を〈自我リビドー ego libido〉〈自己愛(ナルシズム)〉、それが自己以外の対象に向けた状態を〈対象リビドー object libido〉〈対象愛 object love〉と呼んだ。フロイトは晩年には、〈エロス〉(しだいに増大する統一体を作り出しこれを維持することがエロスの目的。生の本能)と〈破壊本能〉(死の本能)との二大本能の対立を認め、エロスのエネルギーをリビドーと呼ぶと再定義した。このリビドーに対立するものとして考えられた〈破壊本能〉を指すラテン語はデストルドー destrudo である。平凡社 下坂 幸三

・フロイトの語る「エロス」と「タナトス」、この二つの衝動が人間の行為や社会的な活動、文化の中ではどのようにあらわれているのでしょうか。

1.0.3 パーソナリティの形成

パーソナリティ (personality :) ← 羅 persona=仮面 → 英 person=人

: 各人を特徴づけ、その人独自の行動様式をもたらす精神と身体の**全体的人間像**

パーソナリティの三要素: **能力** (知): 知能・技術

気質 (情): 感情の傾向

性格 (意): 意志・行為の傾向

※ () 的要因と () 的要因の複雑な相互作用の中で形成される。

(character :) : 人間の行動の仕方や考え方の特徴。広い意味ではパーソナリティと同じ意味で使われるが、**後天的に形成された情緒的・意志的な面での個人差**を指すことが多い。

(temperament :) : **先天的な感情や情緒**の特徴

(individuality :) : 他と区別されるその人固有の性質

() 化: 社会の規則や規範、考え方などを内面化して社会に適応するプロセス

↓

() 化: 自分の能力や個性に即して、周囲の環境に能動的に働きかけるプロセス

パーソナリティの種類

・ () の**気質**類型論: 体型と気質の関連性 『性格と体格』

| | | |
|-----|------------|--------------------|
| 肥満型 | 循環(そううつ)気質 | 社交的, 親切, 気分の上下がある |
| 筋骨型 | 粘着(てんかん)気質 | 几帳面, ねばり強い, 融通効かない |
| やせ型 | 分裂気質 | 非社交的, 静かで内気, きまじめ, |

・ **ユング**の種類: 心的エネルギーの方向性による類型

| | |
|-------|---|
| () 型 | 心的エネルギーが外界へと向かい, 外的な事物や人物に関心を示し, 外界からの影響を受けやすい傾向。新しい場面でも気おくれせず積極的に行動する。 |
| () 型 | 心的エネルギーが内界へと向かい, 内的な事象に関心が向かうこと。控え目で新しい場面ではしりごみする。 |

・ () の類型: その人が追求する価値による類型

| | |
|-----|-------------------------------|
| 理論型 | 真理, 理論に関心をもち知的興味が高い。 |
| 経済型 | 財産の獲得に関心をもち経済力によって人を評価する。 |
| 審美型 | 芸術を愛し, 美の創造に関心をもち。 |
| 社会型 | 社会の福祉, 奉仕に関心をもち。他者への愛に価値を認める。 |
| 権力型 | 政治や他人を支配し命令することを好む。 |
| 宗教型 | 信仰によって生きることに価値を認める。 |

・ **リースマン**の種類: 現代社会に生きる人間像 著作『()』

| 伝統志向型 (前近代) | () 志向型 (近代) | () 志向型 (現代) |
|----------------------------------|---|--|
| 封建時代の特色。伝統, 習慣などの既存の価値観に従い権威に従順。 | 近代市民の特色。行為の指針を個人の良心・理性に認め, 自発的選択によって行動。 | 現代の特色。マスコミや仲間など他人の意見, 周囲の反応を自分の行動の原理とする。 |

- ・アドルノ 1903-69 (フランクフルト学派*) 『() 主義的パーソナリティ』
() 主義的パーソナリティ：ナチスのファシズムを支持した大衆の心理
 - ・強いものに従順, 弱いものに強圧的
 - ・偏見や差別意識にとられやすい
 - ・自分の所属する集団への所属意識が極端に強い
 - ・思考が紋切り型のステレオタイプである など

- ・フロム 1900-80 (フランクフルト学派・新フロイト派)

『() からの逃走』『正気の社会』

: 社会が人格形成に大きな影響を与えていることを強調

社会的性格=あるひとつの社会集団の成員のほとんどがもつ性格構造の本質的中核

⇒制度としては民主制機構を採っていても、被支配者の大部分が権威主義的思考様式をとる限り、権威主義的支配はその威力をふるう。

「自由からの逃走」

近代社会の自由は束縛からの解放をめざす消極的な「…からの自由」であり、生産的な仕事を通して、人間や自然と愛をもって連帯しようとする積極的な「…への自由」ではない。束縛からの解放は孤独と無力感を生み、それを解消するために外部の権威に服従する社会的性格が生まれ、ファシズムの温床となった。

*フランクフルト学派：正統派マルクス主義の教条主義に反対しつつも、なんらかの意味でマルクスの批判的動機を受け継ぎ、それをフロイトの精神分析学やアメリカ社会学の経験的方法と結び付けて、現代の経験を踏まえた「社会の批判的理論」を展開した。

成熟したパーソナリティの6要件

アメリカの心理学者()によれば、成熟したパーソナリティの要件は次の6つ。

- (1)社会的領域へ拡大された自己意識
- (2)他者との暖かい関係性の構築
- (3)情緒的安定性と自己受容
- (4)現実世界と接触する知覚と技能
- (5)自己客観化, 自己洞察とユーモア
- (6)統一的な人生観と調和した生活

ニート (NEET) : Not in (), Employment or Training

: 教育機関に所属せず、雇用されておらず、職業訓練に参加していない者のこと。

人格と性格 —— 百科事典による記述

■ 人格 personality

道徳的にすぐれている人を〈人格者〉というように、日本の慣用法においては人格という語は、カント以後のドイツ哲学思想の影響のもとに、理性的存在者として自律的に行為する主体を意味し、その尊厳性を強調する道徳的意味あいを含む語として用いられてきている。しかし、心理学においてパーソナリティ *personality* の訳語として人格という語を用いる場合、それは道徳的な意味あいや価値的な評価は含まない。それは〈人から〉あるいは〈性格〉の意味にちかく、たとえば〈パーソナリティとは、個人のなかにあつて、その人の特徴的な行動と考えとを決定するところの、精神身体的体系の動的組織である〉(G. W. オールポート)という代表的な定義にみられるように、各人を特徴づけ、その人独自の行動様式をもたらす精神と身体の内的・統一的システムを意味している。

パーソナリティという語はラテン語のペルソナ *persona* に由来するといわれ、それは元来、劇中でかぶる〈仮面〉を意味していたが、その後そこで演じられる役割を意味したり、役者自身や人間のもつ性質の総体を意味するものとしても用いられるようになった。一方、日本語で性格と訳されるキャラクター *character* という語は、もともと〈刻みこまれたもの〉を意味するギリシア語 *charakter* に由来し、やがて事物の標識、特性を意味するようになったといわれている。語源的なニュアンスからすれば、パーソナリティが社会的関係のなかでの役割や社会的効果の意味合いが強いものに対して、キャラクターは深く刻みこまれた内的特質の意味合いが強いという微妙なちがひがある。心理学において両者を同義に用いる場合もあるが、区別して用いる場合には、人格(パーソナリティ)が知・情・意の全体的な統一性をあらわすものに対して、性格(キャラクター)は、そのうちの情意的な側面をさすのが普通である。

また、性格に似た語として気質 *temperament* があるが、それは一般に性格の下部構造をなし、個人の情動的反応の特質を規定する遺伝的・生物学的な特性(神経系のタイプなど)をさしている。古代ギリシア以来、有名な〈多血質〉(胆汁質)〈黒胆汁質〉(粘液質)という気質の4類型があるが、そこには体液の混合の割合がその人の気質を決定するというヒポクラテスに始まる古代ギリシア医学の考え方があった。ちなみに、*temperament* という語は、〈(液汁の)適正な混合〉を意味するラテン語の *temperamentum* に由来している。人格はこうした気質を基底として、社会的諸条件のなかで形成されるのであるが、それはたんに社会が期待する役割に適應できる能力や特性を身につけてゆく過程であるだけではない。種々の要素的な能力や特性を全体として統一し、自己を自己たらしめる個性的なあり方を実現してゆく過程でもある。⇒気質 // 性格

高垣 忠一郎

■ 性格 character

人間の特徴的な行動の仕方や考え方を生み出す元になるもので、行動にみられる多様な個体差を説明するために設定された概念。他人と違った自分だけの行動の仕方をもっているという、生まれつきの〈たち〉、品性、人柄のことであるが、現在では通常英語の *character* の訳語として用いられている。この言葉はギリシア語の *charakter* に由来し、〈刻印〉または〈刻み込まれたもの〉という意味をもっていたが、転じて標識とか特性を意味するようになった。心理学ではキャラクターをパーソナリティ *personality* と同義に用いることもある。パーソナリティという語の起源はラテン語のペルソナに由来し、もともとは劇などで使用された仮面を意味していたのが、しだいに変化して俳優の演じる役割を意味するようになり、ついにははっきりした個人的特質、およびそれをもった人の意になった。キャラクターがどちらかという情緒的、意志的な面での個人差を強調しているのに対してパーソナリティでは行動の統一性という面が重視され、道徳的な価値判断を含んで人格と訳されることが多い。ただしアメリカでは性格という用語はほとんど使用されておらず、ドイツでも人格という用語が一般化している。

【性格学】 性格ないし人格を研究する学問を性格学 *characterology* という。その始まりはひじょうに古く、古代ギリシアにさかのぼり、伝統の一方は16世紀のフランスのモラリストたちに継承され、モンテーニュ、パスカル、ラ・ブリュイエールなどの随想録、箴言集などには深い理解と洞察が見られ、文学作品の中にも興味深く描かれている。他方、科学的にはやはりギリシアで2世紀にガレノスが体液を4種類(血液、胆汁、黒胆汁、粘液)に分け、それによって4気質(多血質、胆汁質、憂鬱(ゆううつ)質、粘液質)の分類を行っている。その後生理学の進歩とともに体液と気質との関連づけは否定されるようになったが、気質の4類型は長く用いられた。

（性格学）という名称を最初に用いたのはドイツの哲学者バーンゼン J. Bahnsen であり、1867年のことである。これは主としてドイツ語圏で発展し、哲学的傾向がみられるのが特徴的である。個々の人間の性格の個人差や性格特性の差異を研究する性格学を差異心理学ともいう（ハイマンス）。性格学が学問として確立したのは類型学からである。その代表的なものとしては、ユング(内向型と外向型)、イェンシュ E. R. Jaensch(統合型と非統合型)、ファーラー G. Pfahler(固執型と流動型)、シュブランガー(理論的人間、経済的人間、審美的人間、社会的人間、政治的人間、宗教的人間の6種型)、エーワルト G. Ewald(反応類型)、クレッチマー(体質学的類型)などがあげられる。また精神病質人格に関しては、クレペリンが主として心理学的特性と社会学的関係から神経質、興奮者、軽佻者、ひねくれ者、虚言欺瞞者、反社会者、好争者、衝動者に分けており、K. シュナイダーは主として臨床経験にもとづいて性格異常(精神病質)を〈自分自身が悩むもの〉と〈社会が悩まされるもの〉に分け10類型(発揚者、抑鬱者、自信欠乏者、熱狂者、顕示者、気分変動者、爆発者、情性欠如者、意志欠如者、無力者)を列挙している。レルシュ P. Lersch は層理論を応用して性格を内部感情的基底と精神生活の上層構造とに二分し、それぞれについて詳細な分析を試みている。哲学的な立場からはクラークスが性格を素材、性向、気性、構築、挙措の属性の5側面に分けユニークな理論を展開している。

哲学的色彩の強いドイツ性格学に比べ、アメリカの人格学は社会学、社会心理学、文化人類学などの影響下で発展している。人格についての定義はきわめて多いが、アメリカの心理学者オールポート G. W. Allport の〈人格とは心理・生理的体系としての個人内にある力動的体制であり、その個人の環境に対する独自の適応を規定するものである〉という定義はとくに有名である。これに対しキャッテル R. B. Cattell の定義は〈人格とは人がある状況に置かれたとき、その人がどうするかを予測させるものである〉とする操作的なものである。アイゼンクは因子分析的・統計的方法を用いた人格研究を行っている。

発達段階による性格研究は精神分析に関連するもので、S. フロイトがその基礎を確立している。彼は人格における自我の機能に注目し、自我と衝動体イドと行動の規準の内面化による超自我との葛藤や妥協を力動的にとらえて、人格をその相互関係の過程の上で扱っている。これに続く者として、フロイトの精神分析から現代精神分析への転向を方向づけたライヒ、超自我の早期形成の影響を解明した M. クラインなどがあげられる。また E. H. エリクソンは人格の形成に関する精神分析理論に比較文化論的・対人関係論的見地を導入した。彼は人格の漸成的発達の理論として八つの年代の発達図式を提示した。新フロイト派に属するアメリカの精神医学者 H. S. サリバンの発達理論は認知3段階とそれに対応する言語発達段階から構成される。人格の形成を対人関係の場における経験が決定してゆく過程としてとらえ、人格そのものが人間相互関係の状況の比較的持続するパターンであり一種の仮説的存在にすぎないとみている。彼の人格説は、人格を固定化せず臨時的な改変も可能であることを示唆していることでは評価されているが、自我や人格の形成における文化の意義までは言及されていない。

この問題をとりあげ、社会がいかに人格形成に大きな影響を与えているかを強調したのがフロムである。彼の性格形成論の根底には社会的性格なる概念があり、それはあるひとつの社会集団の成員のほとんどがもっている性格構造の本質的な中核をなすもので、その集団特有の基本的経験と生活様式とから発達したものであるという。〈社会的性格は外的な必要を内面化し、ひいては人間のエネルギーをある一定の経済的社会組織の課題に準備させる〉。さらに社会的性格を(1)市場的性格、(2)搾取的性格、(3)受容的性格、(4)貯蓄的性格に分けている。また、ゴットシャルト K. Gottschalt らの、遺伝と環境の性格への影響を考慮して双生児法を採用する研究もある。そのほか筆跡による研究、精神障害者の臨床的研究から出発したものなどその方法は多岐にわたっている。⇒気質 // 人格

飯田 真

(C) 1998-2000 Hitachi Digital Heibonsha, All rights reserved.

・これらの記述の中で「人格」と「性格」その類似点と相違点はどのように説明されていますか。

1.0.4 青年期の心理と課題

青年期 adolescence：児童期と成人期の間期の時期，あるいは**過渡期**。一般的には中学・高校・大学生（12,3～22,3 歳）位の年齢

⇒**青年期の延長**：就学期間の延長などにより，現代の青年期は一昔前よりも延長したといわれる。第二次性徴の見られる女子 10 歳，男子 12 歳～14，15 歳ころまでをプレ（前）青年期(思春期前期)，そして 22,3～30 歳までの期間をプレ（前）成人期として青年期に含めるようになってきた。

(puberty) ←羅,英 pubes (陰毛)
：主として青年の身体的・性的成熟に焦点をあてた児童から成人への移行期

第二次性徴：思春期に，性ホルモンの作用によって起こる身体上の男らしさ，女らしさ。

()：青年期の精神的自立。18 世紀フランスの思想家 () による。⇒ 『エミール』

マージナルマン marginal man ()：一つの集団から他の集団へ成員性が変化した場合，集団への所属性が不安定となり，個人は強い緊張を示す場合がある。たとえば，落ち着きのない態度・行動，過度の自己意識など。児童期と成人期のどちらの集団にも属さない青年をドイツの心理学者**レヴィン**はマージナルマンの典型であるとした。

疾風怒濤 (Sturm und Drang) の時代

：心身の変化が著しく，不安と悩みの多い激動の青年期をあらわす言葉。もともとは 18 世紀後半，ヘルダー，ゲーテ，シラーらによるドイツの文学運動。理性や秩序ではなく人間の情熱，力強い感情移入，創造的天才性などを重視した。

発達課題

青年前期の発達課題：心理的離乳，仲間づくり，性的な身体の変化への対応など

青年後期の発達課題：同年輩の異性との交際という新しい仲間づくり，アイデンティティの模索 identity - seeking，職業選択とその準備

アイデンティティ identity ()，自我同一性)

：自分であること，自己の存在証明，真の自分，主体性

→**アイデンティティの危機** (拡散)：青年が親密な人間関係をつくれず，集団の中での自己の役割が見えなくなり，自己を見失って精神的危機に陥った状態。

(moratorium)：大人への準備期間。大人に課す責務を一時期免除した猶予期間(←経済用語より：政府が法令に基づいて債務の支払を一定期間猶予させること)

資料 マーガレット・ミード（米、文化人類学者） 思春期は近代の所産である

ミードは学説史的には一般にベネディクトらと共に、「文化とパーソナリティ」論を発展させた中心的人物の一人として位置づけられている。…ミードは心理学的視点を取り入れて文化がどのように個人に影響を与えるのかを、とくに幼児期から思春期を経て成人に至る時期に焦点を当てて考察しようとした。

ミードが初めてサモアへフィールド調査に出かけるとき、ボアズはこれまでほとんど調査されたことのない思春期の少女について研究するよう示唆した。西欧社会で若者たちが遭遇する「思春期」と呼ばれる精神の不安定な危機的状況が、はたしてS・ホール主張するように発達史的、生物学的な理由によるものでこの社会にも共通して存在するものなのか、それとも社会文化的要因による「近代」の所産なのか。また広くインディアンの部族の少女に見られる「恥じらい」や、性の問題に関してはどうか。ミードはタウ島の三つの村で五〇人の少女について調査した結果、サモアでは思春期のストレスや危機は何ら認められないこと、子どもたちは自由に他の家にも出入りし親子間にはあまり緊張関係が見られないこと、幼いときから徐々に社会的責任を担わされていくので大人になる過程で断絶を経験しないこと、性愛に関しては実におおらかで自由で、結婚も離婚もたやすく嫉妬などの感情があまり見られないことなどを発見し、これらを『サモアの思春期』にまとめた。

『文化人類学群像1』（アカデミア出版、1985）

⇒ 青年期は伝統社会には見られないという主張！

資料 アイデンティティとは

アイデンティティという言葉はほとんど日常語となってしまった。しかしながら、これは日本語に訳しにくい言葉の代表的な一つでないか。にもかかわらず日常的に使われるようになったということは、いかにアイデンティティの問題が現代の日本人にとって切実かをものがたる事実だと思う。

アイデンティティの説明から入ろう。身分証明書や識別票のことをアイデンティフィケーション・カードという。同一人物なることをたしかめ、相違なしと認めることをアイデンティファイするという。それらのことからだいたいニュアンスを汲み取れるように、自分の証明に関わることがらである。アメリカの心理学者エリクソンが1950年にこの概念を提唱したとき、そこに次のような二つの「自分の証明」を含ませていた（『幼児期と社会』仁科訳、みすず書房）。

- ①生まれてこのかた自分は「一貫した存在」として今日まで生き続けており、さらに今後もその延長上を生きるであろうという自信。
- ②自分という存在もしくは自分の生き方が、自分の生きているこの「社会によって是認」されているはずだという自信。

こういう二つの輪があって初めて人間は安定感を持って生きていける。エリクソンは臨床心理学者として精神病とノイローゼの中間くらいの重さの病気に悩む青年たちを治療した経験から、このアイデンティティということはいいたのだった。これらの青年たちがしばしば口にするのは「自分とは何か」「どういふ自分であることがもっとも自分らしいのか」「世界は自分に何を期待しているのか」「世界には果たして自分の座る椅子はあるのか」などの自問自答であった。

笠原嘉『不安の病理』（岩波新書、1981）

「生きる意味」について（資料集 p. 18）

神谷美恵子（1914～1979）：ハンセン病患者療養所での勤務経験をもとに『生きがいについて』を著す。「使命感に生きている人」がもっとも生きがいを感じる人。

（ ）：オーストリアの精神医学者。アウシュヴィッツ収容所に入れられたときの体験を『夜と霧』にまとめた。性欲（フロイト）や権力欲（アドラー）からではなく、「生きる意味を求める存在」としての人間を分析する実存分析という手法を唱えた。